

授業科目名	症候診断治療学 PBL(problem-based learning) tutorial		
対象学年	4年生	単位	9単位
科目責任者	はずめま なおこ 蓮沼 直子	所属	医学教育センター
科目 コーディネーター	はずめま なおこ 蓮沼 直子	所属	医学教育センター
授業方法	<p>小グループによる学生の自主学習を行う。1クールを4日間とし計6クール(予定)を行う。学生は8～9名のグループをつくる。</p> <p>基本的な流れ 各クール初日に症例シナリオの前半を受け取り、その症例の問題解決をどのように行えばよいかを討論する。2日目夕方に中間発表を行う。3日目にシナリオ後半を受け取り、症例の問題解決の方法を討論して考える。4日目夕方に最終発表を行う。中間発表の際には、教員がチューターとして同席し、必要に応じて討論の方向にアドバイスを与える。 シナリオにより上記と異なる流れとなる。各クールの初日の指示に従うこと。</p>		
概要	<p>従来医学部では講義中心の教育が行われ、知識を伝授することに重きがおかれてきた。しかし、医師の仕事は生涯が学習であり、受動的に知識を受けるのみでは、主体的な学習姿勢を養うことはできない。本科目では講義は少数が限定的にあるのみで、授業は学生の主体的な学習行動を中心として構成させる。学生は、目の前にある課題(症例)の問題点を自らみつけ、その解決法を考えるなかで学習し(problem-based learning: PBL)、自分が何を知っていて何を知らないか、何を知らなければならないかを常に自分で考える習慣を身につける。また、臨床推論に即した思考過程を通じて、知識を統合・構築・応用する能力を身につける。</p>		
到達目標	<p>学ぶべきことを自ら考えて学ぶ主体的な学習を行うことができる。</p> <p>解決すべき問題点を発見し自己学習によって解決していく問題基盤型の学習法を行うことができる。</p> <p>必要な課題を自ら発見できる。</p> <p>自分に必要な課題を、重要性・必要性に照らして順位付けできる。</p> <p>課題を解決する具体的な方法を発見し、課題を解決できる。</p> <p>自分の持つ知識をネットワーク化して整理し、応用することができる。</p> <p>適切な自己評価ができ、改善のための具体的方策を立てることができる。</p> <p>他者とのコミュニケーション、相互理解、協力、共働をすることができる。</p> <p>患者の症候から症候学、診断学の知識を用いて疾患を診断し適切な治療方針を立てることができる。</p> <p>課題の解決に当たり、他の学修者や教員と協力してよりよい解決方法を見出すことができる。</p> <p>講義、国内外の教科書・論文、検索情報等の内容について、重要事項や問題点を抽出できる。</p> <p>必要な情報が検索できる。また、その情報の信頼性、妥当性についても検討できる。</p> <p>生涯にわたる継続的学習に必要な情報を収集できる。</p> <p>問題の同定から治療やマネジメントに至るプロセスを列挙できる。</p> <p>情報収集には医療面接、身体診察、検査の3つの方法があることを説明できる。</p> <p>診断仮説を想起するためには、解剖学、病理学、生理学、生化学等の基礎医学や疾患頻度が重要であることを説明できる。</p> <p>診断仮説を検証するために、診断仮説に基づいた情報収集を実施できる。</p> <p>診断過誤の原因とその防止法を説明できる。</p> <p>状況に応じ、診断プロセスと治療やマネジメントが並行して行われることが説明できる。</p> <p>治療やマネジメントに関して意思決定するために、患者側と情報共有や摺り合わせをすることができる。</p> <p>コンサルテーションや紹介の必要な状況を説明できる。</p> <p>基本的診療知識に基づき、症例に関する情報を収集・分析できる。</p>		

到達目標	<p>得られた情報を基に、その症例の問題点を抽出できる。      病歴と身体所見等の情報を統合して、鑑別診断ができる。      人の言動の意味をその人の人生史や社会関係の文脈で説明することができる。      主要疾患の症例に関して、診断・治療計画を立案できる。      臨床疫学的指標（感度・特異度、尤度比等）を考慮して、必要十分な検査を挙げ、症例における検査結果の臨床的意義を解釈できる。      患者の症候から症候学、診断学の知識を用いて疾患を診断し適切な治療方針を立てることができる。      科学的根拠に基づいた治療法を述べるることができる。</p>
講義日程	別途通知する
出席の取り扱い	<p>本科目は実習として扱う。したがって、すべての日程に出席すること。各クール1日目と3日目のコアタイム, 2日目と4日目の朝のグループ討論, 2日目と4日目の夕方の発表会などでは出席をとる。</p> <p>出席は基本的にはMicrosoft Formsで確認するが講義中のプロダクトの提出、その他の方法を併用することがある。講義中の指示をしっかりと聞くこと。</p>
評価項目	コアタイムの際の討論への貢献度、発表プロダクト、各クールごとに提出する症候に関する個人レポートを評価する。期間中の態度も評価する。
評価法	<p>独立した試験は行わない。上記評価項目での得点を全クール分総合し合否を判定する。出席、プロダクトの内容などにより補習を行うことがある。対象者はこれに参加しないと単位が与えられない。</p>
予習・復習へのアドバイス	クールごとに提出する症候に関するレポートは、単に情報をまとめるだけでなく、論理的に組み立て、臨床推論のプロセスや根拠を明確に示すよう心がけてください。
推奨参考書	